

(別紙2)

## 論文審査の結果の要旨

論文題目：三明説の伝承史的研究

副題目：部派仏教における仏伝の変容と修行論の成立

氏名：馬場紀寿

本論文は、ブツダの覚りの内容を示し、かつ、仏教修行論の中心的位置を占める「三明」<sup>tevijjA</sup>と称せられる概念が、いかなる変遷を経て相異なる二つの解釈「四諦を覚ってブツダとなった」という「四諦型」と、縁起を観察してブツダとなったという「縁起型」を共存させる現型にまでいたりついたのであるかを、パーリ経典とその膨大な分量の註釈書の解読と分析をとおして、明らかにしたものである。

相互関係の必ずしも明らかではない諸教義の集成である原始仏教時代の諸経典類の内容は、部派仏教と称される時代の仏教者たちの解釈の努力によって、諸教義の有機的、整合的な関係からなる一体系の仏教思想へともたらされた。アビダルマと称されるこの知的営為は、だが思想史を研究する研究者たちにとっても強固な枠組みとなり、現代の研究者たちは、一つ概念を取りあげるとき、部派仏教において体系化された理解においてのみ捉えてしまうことが少なくない。加えて、資料の稀少さも手伝って、伝承部派の系統の差異への配慮もなされないことが多いため、しばしば仏教の概念史は部派横断的な性格をも併せもったアマルガムに留まっている。「三明」という概念はその代表的なもののひとつであり、文献によって異なる内容を有した概念でありながら、その理由が問われることもないままに放置されてきた。

論者はこの問題に着目するとともに従来の研究方法を反省し、まずは研究対象を経典およびその註釈書ともに上座部大寺派という同一系統になるパーリ文献に限定した。ついでこの系統において教義体系を確立したブツダゴーサが、なかでも中心的教義となる「三明」をいかに体系づけようとしたかを、経典にたいする彼の註釈手法に着目することによって明らかにし、その結果、「四諦型の理解が原初であったものが縁起型に変化した」ことを解明した。こうして得られた上座部大寺派の「三明」解釈変容の歴史を、最後に系統の異なる北伝の文献に照らし合わせ、この変遷にはこれまで伝統仏教の教義確立とは無縁と見られていた「仏伝」が大きな影響を与えていること、この変化は大乗仏教の出現とも軌を一にする変化であることを論じた。

仏教教義の根幹をなす「三明」を、歴史的変遷を内包した概念として明確にした本論文は、同時にこの主題の解明に沿って、アビダルマ 経典という仏典の形成順序の一部逆転、北伝の「経典」とパーリ「註釈文献」のカテゴリーを超えた重なり、上座部における説一切有部と共通する縁起解釈（三世両重の縁起）の解明など、これまで知られていなかった重要な諸問題についてあらたな知見を提供している。論文の構成において、また細部の議論についてはさらに考察を要する課題を抱えてはいるものの、現在の学界における貢献は大きなものがあり、審査委員会は、博士（甲）に値する論文であると判断する。